
「肩書き」

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「肩書き」

【Nコード】

N3063F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

ピーヒャラ・トンピーヒャラ・トンピーヒャラ・ピーヒャラピーヒャラ・トンガム公、グミ助、チョコ坊の3人が繰り広げるコメディイイ小説。

「肩書き」

ピーヒャラ・トン

ピーヒャラ・トン

ピーヒャラ・ピーヒャラ

ピーヒャラ・トン

エー、毎度のお付き合い、まことに有り難う御座います。

見掛け倒して事を申しますが、日本民族の嫌いなタイプのひつです。

「うどん屋の釜じゃあるめえし、ユウばかりじゃ、しょうねえ」

料理学校出たから、俺は調理師だ。だとか、車の運転免許があるから、運転できる。なるほど、確かにそれに違い御座いません。肩書きは取れる時に取っておけ、中味は後から付いて来る。

肩書きに、経験という中味を付けるわけですが、経験と肩書きのバランスが、なかなか取り難いのも、まッ、人生。

板前になって五年生のグミ助、二度調理師試験に失敗し、経験はあるけど、肩書きがない。海の魚を真水で洗えば生でも食える。こんな当たり前の事を腸炎ビブリオ菌は、真水で洗浄する事。なんて、肩書きのある新人に言われた日には、腸炎が延長でも、ビブリオがデカプリオでもいい、手めえでやれ、なんて、どやしたくなるもんです。

でも、どやしたり、引っぱたいたりすれば、やれハラスメントだ差別だ暴力だって、事情はともかく世間が騒ぐ。グミ助、その悔しさを、聞いて欲しくて、ガム公の住んでるチョコ坊のマンションにやってきました。

マンションの裏手が山並み、表通りが海岸に面している。グミ助、そこまで来て、しばらく海を眺め、マンションを眺めて、はアッと

溜息をつき

「情けねエなアー、新座者に、能書き言われ・・・肩書きあるから仕方ねエが、ハイって言ってる自分が情けねエ」とか何とか言いながら、前を行ったり来たりしてたんですが、吹かれたように、マンションに入っていく。

誰でも、このオ胸ン中にあるいやな事を、誰かに言いますと、何か胸がスツキリする、って事があります。行くと、チヨコ坊は外出中。ガム公は横ンなつて、テレビで007かなんかを見ている。その姿をボーっと見ながグミ助が

「いいな、のんきで」なんて言ったもんですから、横になっていたガム公が、ガバツと起きて

「何がのんきなんだ」とグミ助を睨んだまでは良かったんですが、その姿を見ると

「どした、お化け見てえに突っ立って、生きてんのか」

するとグミ助が、いきなり膝を折り、ひしゃげた蛙のように座りこむと

「おれ、情けなくつてさ」

「なにが、どうしたんだ」言っただけで、わけを話せば、ガム公の兄イが腕組み辛抱、じっと考え

「板前、職人の一番辛れえところだ」

グミ助、へ、と顔を上げた。

ガム公が爪をいじりながら、くぐもった低い声で

「知ってたか、久治朗親方、免許なんざ持ってねえ」

グミ助、又も、ヘツとなつて、首を前に出し、目パチクリ。

「んな、俺を励まそうって、気は嬉しいが、見えすえた冗談じゃ、シラケ鳥がピーチクパーだぜ兄イ」

「ん、だが本当だ、むかし、高知のカツ節職人で、カツヲを五枚下ろしにするのが、人の三倍速いと、親方の知人から聞いた。俺が小僧で、今の活春に入った初夏五月。初カツヲが入荷し、まな板を前にした親方の前に、銀皮向うで頭が右、カツヲが置いてある。アレ

ツて思つてた俺に、素焼き八寸だつて言つた親方の目が、ピカーツと光つたのを今でも覚えてる。びっくりして八寸取りに行つて、ワクワクしながら戻つてきたら、もう刺身が出来ていた。ものの一分もかかったかどうか」

ガム公、生唾をゴクリと飲み、顔を上げ、視線を上に向け、静かに目を閉じ、はく息に声を乗せたような声音で

「神技つてなア、あの事だな」とつぶやいた。

別人になつたようなガム公にグミ助の目が張り付いた。

ガム兄イの目尻に光る一筋。グミ助、ザザツと畳を蹴つて座り直した。

「兄イ、俺が馬鹿だつた」

「じゃねエが、慌てもんだ」ここでグミ助、三度の、へ。

「中味のねえ肩書きで、いくら着飾つても、底が浅えからすぐバレル。これじゃ金も女も着いちや来ねえ」言葉を切つて、ひよいと気が着くと、グミ助がいない。

「グミ、トイレかあ」

「こ、ここにいる・・・」蚊の鳴くような声がガム公の後ろでする。グミ助、部屋の隅で平蜘蛛になつて泣いている。

「ま、いい、久保田の万寿、冷え頃だ、持つてこい」グミ助が涙と鼻水を掌でぬぐいながら立つていきます。

「おい、手え洗つてからもつてこいよ」

勝手知つたる他人の家。櫛型レモンの小鉢、荒塩の入つた小鉢、小皿に檜の一合枡を乗せ、運んでいきます。用意の出来た日暮れ時、どこかで蝉の声がする。

「グミ助、親方が板前仕事してるの、見たこと有るか」

「あるさ、とにかく手際がいいつて言うか、何でも切り裁いて行く」

「そうじゃねえ、鍋前の事だ」

「鍋前かア・・・ねエな」

「だろ、解るか、その意味」冷えた枡酒をキュツとやって、荒塩をカリツと噛んではコンニャク問答の二人。

枀からこぼれた小皿の酒をツツツとすすってグミ助

「ねえな、どういふことだ、兄イ」

「庖丁人だからさ。昔は板前、料理人を、そう呼んだが俺の解釈は違ふ・・・車の教習所には教官がいる、スポーツにはコーチがいる。教官やコーチは生徒や選手に技術を教えるんだろ。その技術をどう使うかは、選手や生徒のかつてだろ。違ふか」

「そらア、そうだが、それと庖丁人と、いったいどんな関係があるだい」

「この野郎、酔って来やがったな、深酔いしねエうちに言うから、耳イかつぽじいて、よつく聞け」

「兄イだつて酔ってんじゃねえか、なんだい、その巻き舌」

「るせえ、庖丁人てなアな、教官やコーチと同じだ。言ってみりや、板前に庖丁の磨ぎ方とか使い方を教える教官だ」

「でもオオあの教官、自分で仕事はしても、教えてくんねえぜ、なんでだい兄イ」

「知りてえ事を、聞けばいいじゃねエか、聞かねえから、言わねエだけさ」

「何、聞けばいいんだ」

「こッからだな、馬鹿と利巧の差が出るのは」

「どんな差だ」

「聞きてえ事が多い奴ほど利巧つてこつた。プールサイダーになつて見てるだけじゃ、美味しい物は出せねえ。切ったハツタは庖丁人だが、美味しい不味いは板前仕事だ」

「頭、ゴチャゴチャしてきた。プールサイダー、なんだア、三ツ矢サイダーとかラムネなら知ってるがよ」　いよいよ酔ってきた二人
チヨコ坊が、外から帰ってきてみれば、奥で二人の声がする。　あ
あ涼風に誘われて冷酒だね、それじゃおでんが丁度いい。台所へ入
つて、出来合いのおでんの袋を切つて鍋に入れ、コトコトやりだし
ます。　こう気の利いた女性を女房にしたいですが、なかなか。

和ガラスをぬるま湯で練る。カツヲ風味の即席出しに昆布茶を入れ

ると、何とも言えない日本の香。大きな盆に鍋ごと乗せ、取り皿、和ガラシ、レンゲをそろえ、奥へと運ぶ

「お、帰えってたのかい」

「知ってたくせに・・・」

「ん、まアな」

「始まった、おでんより熱いじゃねエか、お二人さんよ」

「帰りがけ、つい買っちゃったけど、よかった、さ、グミちゃんもどうぞ」

「どうぞって、兄イには袋と筋で、俺にはでえこんか、二人して、好きにやってくれ」

グミ助、二人にかまわずカラシを塗って大根を頬張った。

「ああ美味めえ、美味めえけど、やっぱ違うな」

「グミちゃん、食べながら何言ってるの、食べてから、ユックリお話よ。何が違うって」

フーハーいいながら飲み込んだグミ助

「あのさ、親方が桂剥きして、残った大根をよ、俺がたまに炊き込むんだ、荒炊きだったり、おでんだったりなんだが、どうも何かが違うんだ。これと」

言いながら食べかけの大根を顎ですす。ガム公、頬を崩して

「解ったか、そこだそこ」

「そこって、どこだ」

「大根だ大根、骨え張って思い出せ、親方の大根とこの大根、どこが違う・・・ん、グミ」

グミ助言われて、大根をジーツと、穴が空く程睨み

「ザラツキがある、親方のはない」

「よし、それでいいグミ、お前えの大根と、この大根、同じだろ。親方のは、違うだろ」

「ん、ああ、でも」

「どっから来るか解るか」

「解らん」

「庖丁の冴えと使い方だ」

「ナイフかア・・・」

「バカ、和庖丁とブリキナイフ、一緒にすんじゃねエ、そんなこつ
ちや、肩書きのほうで、二の足踏ンでらア」

ピーヒャラトントンソロソロー服、アラドッコイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3063f/>

「肩書き」

2011年1月22日14時35分発行